

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第七回 論吉の中のマキヤヴェリズム

明治維新により日本は近代主権国家として登場することになった。しかし、新生国家というに相応しい内実が備えられていたわけではない。日本による開国要請を頑なに拒む朝鮮に「征韓論」をもって迫る西郷隆盛に対し、岩倉使節団の欧米視察から帰国した大久保利通は、戦争を引き起こしかねない征韓論をもって朝鮮とことを構える余裕は目下の日本にはない、文明国をめざして全力を富国強兵・殖産興業に注ぐべきだと主張。結局のところ、西郷はこの「明治六年の政変」に敗れて鹿児島に下野。その頃から廃藩置県によって特権的身分

を奪われた不平士族の反乱が各地で頻発、さらには大久保などによる専制的政治（「有司専制」）に対する批判が自由民権運動として大きな高まりをみせた。

福澤論吉といえば、天賦人權説や社会契約論の正当性を説いた啓蒙思想家である。それゆえ氏は自由民権論者だと捉えられがちだが、ここははっきりと否だといっておかねばならない。往時の論点を一言でいえば、日本の国家統治の中心軸を「民権」におくか「国権」にするかで争われていた。福澤は、現在の日本は国権の危機下にある。欧米列強

によつて日本の国権が暴力的に抑圧され、下手をすれば破壊されかねない状況に直面しているではないか。そういう状況を眼前にして、ただ民権を重んじて国会を開設すれば問題が解決されるというようなわけにはいかない。まずは国権を確立して、しかる後に民権へと進むべし、といった論調がこの頃の福澤のものであった。

「国は人民の殻なり。その維持保護を忘却して可ならんや。近時の文明、世界の喧嘩、誠に異常なり。或は青螺の禍なきを期すべからず。この禍の憂うべきもの多くして之を憂る人の少なきは、記者において再び不平なきを得ざるなり」

福澤による『時事新報』の創刊は明治十五年、右の論説はその前年に著した『時事小言』のものだから福澤はまだ記者ではないが、すでにそんな気分である。

国権か民権かの思考軸とは別に、福澤は「正道」か「権道」か、というもう一つの軸でものを考えるよう読者を促す。権道というのは「手段や方法は道

義から外れているものの、結果からみれば正道になつてゐる」といった意味である。「天然の自由民権論は正道にして人為の国権論は権道なり」という。天然の民権論とは、『学問のすゝめ』で説いたように「政府は国民の名代にて国民の思う所に従い事を為す者なり」と表現される社会契約説であり、こんなことは元来が当たり前の話で多弁を要しないと福澤はいう。しかもこの正道の民権論では、列強がアジアの植民地化を虎視眈々と狙う「禽獣の世界」にあつては、日本の生存さえ危ういではないか。

「近年、各国にて次第に新奇の武器を工夫し、又常備の兵員を増すことも日一日より多し。誠に無益の事にして誠に愚なりと雖ども、他人愚を働けば我も亦愚を以て之に应ぜざるを得ず。他人暴なれば我亦暴なり。他人権謀術数を用れば我亦これを用ゆ。愚なり暴なり又権謀術数なり、力を尽して之を行い、復た正論を顧る違あらず。蓋し編首に云える人為の国権論は権道なりとは是の謂にし

て、我輩は権道に従う者なり」

マキャヴェリが十五、十六世紀のイタリアの政治の現実を前に、政治的な目的達成のためには君主は反道徳的な手段を用いても許容されると説き、これが後世、マキャヴェリズムつまり権謀術数主義といわれるようになった。福澤という人物は、広くそうイメージされているような理想主義者ではない。逆に徹底的なりアリストである。社会契約説は正道だが、権謀術数の世界に身をおくものとして「我輩は権道に従う者なり」とみずからの立ち位置を明瞭に宣言しているのである。

幕末維新期を凌ぎ、西南戦争も終焉して国内の政治社会はどうか安定してきたようにみえるが、欧米列強のアジア進出の横暴なありようを前にすれば、いまは国権こそを強化しなければならぬ時期ではないか。

「内国の政治既に基礎を固くして安寧頼むべきの場合に至れば、眼を海外に転じて国権を振起するの方略なかるべからず、我輩畢生の目的は唯この一

点に在るのみ。読者も必我輩と見を同じうすることならん。抑も外国の交際は相互に権利を主張するものにして、情を以て相接するに非ず」

日中共同声明が発出され、日中の国交樹立がなつて五十年である。この間、日本は中国から国益に触れる難題をいくつもふっかけられ、それらに「情を以て相接」してきた。首相の靖國神社参拝などの文化的伝統に関わる問題、教科書の記述についての歴史認識問題、尖閣諸島への侵犯などの領土主権に関わる問題、これらに日本政府は毅然たる対応を取ることができなかった。

顧みて忸怩たる思いを打ち払うことができないのは、平成四年十月、天皇陛下のご訪中にまで日本政府はなぜことを進めてしまったのか。皇室の政治利用といえは言い過ぎかもしれないが、こんなことまでしてしまった日本政府の対中対応にはまことに慚愧に堪えないものがある。これによって対中関係が少しでもいい方向に進んだのであれば、私の儼然たる思いも少しは癒されようが、事実は中国

の強硬な主張、日本の一方的な譲歩という形で推移してきた。なぜ譲歩を重ねてきたのか。福澤のいう「情を以て相接すること」をよしとする日本人の「性」に由来するのであろう。権道や権謀術数は日本人にはさして向いていないのかもしれない。

中国と国交を開いたのももちろん日本ばかりではない。米国もまたキッシンジャー特別補佐官が極秘訪中、ほどなくしてニクソン大統領が訪中して「上海コミュニケ」を発表、準備を整えたうえで一九七九年、カーター政権下で正式な国交樹立にいった。同時に、米国は議会決議により「台湾関係法」という国内法を成立させ、対中国交樹立前に台湾との間で結ばれたすべての条約、外交上の協定の維持を宣明したのである。米国の大国としての外交姿勢にはみるべきものがある一方、日本は大国の陰に身をひそめ、みずからを主張することのあまりの少なさに振り返って愕然とさせられる。福澤はこうもいつていた。

「情の反対は力なり。外国交際の大本は腕力にあ

りと決定すべきなり」

同じ日本とはいえ、明治の時代の日本は現代より深くパワーポリティクスを理解し、力をもって対抗してきたかにもえる。たとえば日清戦争時における外務卿が陸奥宗光である。戦争は戦う以上は勝たねばならないが、勝利してなお列強の反発と干渉を覚悟しなければならぬ。みずからを「被動者」、清国を「主動者」とし、余儀なく戦わざるを得ない戦争だと装うことに陸奥は努めた。清国が飲むとは考えにくい朝鮮の「日清共同改革案」を提示、清国と朝鮮がこれを拒否したことをもって開戦の大義としたのである。権謀術数というべきであらう。ポスト・ウクライナの時代を日本はなお情で生きていくのであろうか。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア」停滯のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。